フレッシュなポロック

今回はジャクソン・ポロックJACKSON・POLLOCK(米国1912～56)の油彩1点，ドローイング3点，銅版7点，シルクスクリーン3点計14点の展示である。作品の作成年代がシルクスクリーンを除くと1944～6年に集中することとなったが，偶然とはいえ興味深いことである。

「ポロック以後」という言葉がある。東野芳明さんの「現代美術――ポロック以後――」(美術出版社，1965)という本が思い出されるのであるが，この言葉にはセザンヌ以後，ピカソ以後という言葉と同じような意味と響きをぼくに与える。すなわち，セザンヌやピカソを除いてそれ以降の，つまりは20世紀の美術が存在し得ないように，ポロックを度外視して戦後の現代美術は成立し得ないという意味合いをもっているのである。ポロックは彼の生きた時代，彼の仕事の意味そして彼の劇的な生涯等から，戦後何人かのすぐれた作家がいるにもかかわらず，彼等とは異なる際立った独特の雰囲気を持った作家である。神話的な存在とされる所以であると思う。

今回の展示はポロックのそれこそその一端を示すに過ぎない展覧会ではあるが，ポロックの作品が少く，それをみる機会が少いだけに，幾分の意義はあるのではないかと思っている。美術愛好家の皆様にはぜひともみていただきたいと思っている。そんなわけで今回はポスターも作成した次第である。

さて，ぼくが一番最初にポロックをみたのはいつごろであったか？記憶の糸を手操り寄せ思い出してみると，それは昭和41年10月，東京国立近代美術館(その頃は京橋にあった)で開催された〝現代アメリカ絵画展〟(TWO DECADES of AMERICAN PAINTING)をみた時のはずである。ハズデアル，というのはまことにタヨリナイ話であるが，正直なところ，その時点ではアメリカの現代美術についてぼくは全く無知でありポロックという作家の名前など全く聞いたこともなく，したがって記憶にあるはずがないのである。

当時，昭和41年というとぼくは銀行員であった。その2年前たまたまぼくの担当している会社がムツカシイ状況に陥り，その会社へ出向を命ぜられた。丁度山陽特殊鋼やサンウェーヴが倒産した頃である。約2年間，大変得がたい経験を積んだが，つまるところ病気になり2ヵ月の入院生活を余義なくされたのである。この入院中，病室に好きな美術書をもってきてもらい，永年の渇をいやしたのである。今考えてみるとぼくにとってこの病気は一つの転機であったように思う。その年の9月から銀行に復帰したが，一度銀座の画廊なるものをみて廻りたいものだという気持をもつようになっていた。そんな時，その案内をして下さったのは先輩の美術愛好家Oさんで，最初の画廊はOさんの友人である洲之内徹さんの現代画廊であった。

そういう状況下においてこの展覧会をみたのであるから，むしろ見に行ったのが不思議でどんな風の吹き廻しで出掛けたのか今もってよく分らない。その時の印象としては大きなキャンバスが林立し，抽象的な作品が多く，全く見慣れないものに取り囲まれた感じで，強い違和感を感じたのを憶えている。しかしこの展覧会はいま書架からカタログをとり出し開いてみると大変すばらしいものであったことが分る。ポロックを始めニューマン，ロスコ，ジョーンズ，ラウシェンバーグ，リキテンシュタイン，ステラ等35作家，出品点数112点で構成されている。なかでもポロックは20号相当から120号相当の大きさの油彩が6点(1948～52)も出品されており今考えると信じられないほどの豪華さである。この展覧会はニューヨーク近代美術館の国際巡

回展として開催されたものであるが，かりに現時点でこれと同じ展覧会を編成するとしたら，勿論不可能ではないにしても大変困難な大事業となるであろうと思われる。

ここで一言付け加えておきたいことは，仄聞するところこの昭和41年という年に，大原美術館は南画廊から例のカットアウトのポロックの作品(油彩, 1948, 77.3×57.0㎝)を購入しているのである。この作品は東野芳明さんがマーサージャクソン画廊(NY)で見つけられたものときいている。(東野さんの「現代美術—ポロック以後—」の口絵はこの作品である)その当時のわが国の状況から考えると，この時点でポロックを購入するというこの事実はまさに〝見識〟というべきである。今でこそ大原美術館への入館者数は世界でも屈指のものときくが，その当時は少く，したがって作品購入に当ってはご苦労が多かったときく。買った大原さんも売った志水さんもともに立派だなと思う。さる11月10日，大原美術館は創立50周年を迎え，ぼくはその記念式典の未席をけがしたが，ポロックなど現代美術がならんでいる別館をゆっくりとみながら，そう思ったのである。なお，当館にはドローイングの優品「白鯨——モービィデック——」(1943 C.48×60.5㎝)があることも付け加えておきたい。

ところで，ポロックが大変スゴイ作家であるとぼくが思うようになるには，それほど時間はかからなかった。その後南画廊や東京画廊を訪ねたり，ハーバード・リードの「近代絵画史」(大岡信訳，紀伊国屋書店1962，原著1959)，東野芳明さんの「現代美術——ポロック以後」(美術出版社，1965)それに大岡信さんの「ポロック」(みすず書房, 1963)などを読んだりしているうちに急速にコンテンポラリーアートに傾斜して行った。前掲のリードの本は多くの戦後作家が美しいカラー写真で紹介されており参考になった。とくにポロックに相当の頁を費しているのが目立つ。戦後10年を過ぎたばかりの時点でこの本を書いたリードはさすがだなと思う。それはともかく，ぼくにとってポロックの存在はますます大きなものとなっていったのは当然の成り行きといわねばなるまい。

丁度そんな状況にある頃，ぼくは1971年に東京画廊で開催されたポロック展(ドローイング，銅版，シルクスクリーン)を大変興味深くみたものである。そこでシルクスクリーンを1点買い求めた。ぼくがポロックを本当にみたといえるのは実にこの展覧会まで待たねばならなかったのである。絵画はその実物を自分の肉眼でみることを離れて成立し得ない。図録ではなく実物を実際にみることが絶対条件である。そして身銭を切るところまで行くとこれはまず尋常ではないのである。

さて，ポロックはその生涯に油彩作品を何点作成したであろうか？O'Connor と Thaw両氏が編集したカタログレゾネによると次表のとおりである。

油彩年代別作制点数一覧表

年代	点数	年代	点数
1930-33	10	1947	19
34-38	46	48	32
38-41	29	49	41
42	3	50	56
43	14	51	35
44	19	52	18
45	12	53-55	15
46	33	計	382

A Catalogue Raisonné of Paintings, Drawings & Other Works.
Edited Francis Valentine O'Connor & Eugene Victor Thaw.
Yale University Press 1978, 4Volumes.

この表をみて気付くことは僅か44才で亡くなったこともあり，総作成点数が382点と少いことが挙げられる。もっともレゾネ作成後に発見された未収録の作品もあるので400点を越える

と推測される。(なお、現在追補版の出版が進められている。)1950年の作成点数が際立って多いが，これはこの年にポロックの芸術が頂点に達したことと照応する。そして晩年(1953～5年)——と言っても彼は40才を越えたばかりであるが ——は著しく作成点数が少い。これは彼の死(1956年8月)が半ば自殺的な自動車事故であったとされるように，彼自身スランプに陥り思うように作品が生れてこない苦悩の時期であったことを示しているといえよう。

この展覧会に展示している油彩の作品につき若干記しておきたい。この作品は新発見のポロックである。したがってカタログレゾネには集録されていないが，現在編集中の追補版に集録されることを編集者のThaw氏が言明している。この作品は生前ポロックと親しい友人関係にあった所蔵家が愛蔵されていたもので，展覧会歴はない。したがって，今回始めて陽の目をみることになったいわゆるウブい作品である。

この作品はメゾナイト(木質繊維板)に画かれており，この作品の左下にはJackson Pollock 46のサインとさらに裏面には46Pollockと大きなサインがあることから明らかなように1946年の作品である。ポロックの作品は概して重い色調のものが多いが，この作品は大変明るい。明るい黄色がベースになり，その上にブルー，ピンク，レッド，グリーン，オレンジ，ホワイト，グレー，ブラックとまことにはなやかで楽しい。そのうえコラージュ(中央下)まであるのだからうれしい。

もっとも注目すべきことは黒エメナルのドリッピングである。マッソンやミロ等の影響がみられる画面に黒エナメルのドリッピングがほどこされている。この作品はまさにポロックのポロックたる所以を示すドリッピングの手法の誕生を示す貴重な作品といえる。カタログレゾネを調べてみるとこのことがはっきり裏付けされる。

この作品を最初にみた時の興奮は今もって忘れがたく鮮明である。この作品をみていて感動するのは，新鮮で生き生きしているからであり，われわれに活力を与えてくれる力をもっているからだと思う。これはぼくだけがそう思っているわけではないことを付け加えておきたい。

ポロックについては多くの評家が言及しているが，一応まとまった参考書としては前掲のリード，東野芳明，大岡信各氏の著作のほか，藤枝晃雄「ジャクソン・ポロック」(美術出版社，1979，P.265)が挙げられる。この藤枝さんの著書は真正面からポロックに取り組んだ大作である。今回このカタログを作るに際し再読したが教えられるとこが多かった。

このカタログにはところどころにポロックのナマの言葉を挿入した。これはご了承を得て最近亡くなった宮川淳さんの「ポロック——その言葉。イメージの回生を求めて」(宮川淳著作集II p390～3)から転載させていただいたものである。なおポロックの版画についてはカタログレゾネ(第4巻)を参照し，小文を巻末にとりまとめているのでご参照いただければ幸いである。

最後にこの展覧会のために貴重な作品を心よくお貸しいただいた所蔵家各位に対しお礼を申し上げたい。当画廊のコレクションだけではとうていこれだけふくらみのある展覧会にはならなかなったわけで，そのご好意に深謝する次第である。ポロックの展覧会をやるということはぼくの年来の夢のひとつであった。それがぼくなりにこのように実現することになったことを率直にうれしく思っている。ぼくにこの夢をかなえさせて下さった先輩・友人に熱い感謝の意を表したい。

1980年12月8日　佐谷画廊

佐谷和彦

ポロックの版画について

ポロックの版画については従来その内容がはっきりしていなかったが，O'Connor と Thaw 両氏の編集によるカタログレゾネ（全4巻，版画については第4巻に収録）が1978年に刊行されたことにより，その全貌が明らかになった。

このカタログレゾネのなかでWilliam S. Lieberman氏がポロックの版画について述べておられるのでくわしくはこれを参照されるのが一番であるが，ここではその大要を紹介してご参考に供したい。

カタログレゾネから版画の手法別年代別の一覧表を作ると次表のとおりである。この表から一見して明らかなように30年代は石版（12点），40年代は銅版（11点），50年代はシルクスクリーン（9点——うち1点は1943年）とまとまりがよく計32点が知られている。

版画作成手法別年代別一覧表

	Lithograph 石版	Intaglio 銅版	Serigraph シルクスクリーン
1934	1		
35	3		
36	3		
37	5		
⋮			
43			Greeting Card 1
44		3	
45		8	
⋮			
50			Greeting Card 1
51			Poster 1 Portfolio,1set,6 >7
計	12	11	9
			32

注：作成年代のまたがっているものは最終年とした。

まず石版であるが，ポロックは1932～5の間，Art Students Leagueで石版の勉強をしたことが知られているが，彼の初期の作品はThomas Hart Benton の影響が大変強い。現在残されている石版は一つの例外を除くとすべて1934～7の間にTheodore Wahl (NY) によって摺られたものである。ポロックの石版は通常2～3枚しか摺られていないが，例外的に2点のみ10部(Coal Miners) および60部(Stacking Hay) 摺られている。サインのあるものは，例外の上記2点のほか4点計6点である。カラーの石版はなくすべて白・黒のみである。

次に銅版であるがポロックは1944年の秋と翌年春に11点作成しているが，すべてStanley William Hayter のアトリエ・17(NY) でヘイターの協力により作成されている。しかしながら1966年に版が発見されたときは9点しかなく，2点は失われたものと考えられる。またさらに2点は版の状態が劣化しており，結局7点が復元されることとなり陽の目をみることとなった。

翌67年にこの7点の版がEmiliano Sorini (NY) のエディションで摺られることとなった。この7点のうち6点はおのおの50部(1/50～50/50) およびプリンタース・プルーフ1部計51部が白いイタリヤ紙で，そのほか10部(1/x～x/x) が淡黄色の高知紙で摺られている。例外の1点は10部 (1/10～10/10) とプリンタース・プルーフ1部計11部が白いイタリヤ紙で，そのほか10部(1/x～x/x) が上記と同様に淡黄色の高知紙で摺られている。この版画には左下に円型のカラ押しのスタンプ(Estate of Jackson Pollock 1967, Po) および ES (摺り師の頭文字)のカラ押しスタンプがそれぞれ押されている。勿論ポロックのサインはない。なおこの7点の版画はVirginia Allen が監修している。

この版画が摺られた後，すべての版は封印され，ポロック未亡人Lee Krasner Pollockが

ニューヨーク近代美術館に寄贈し，現在は美術館が保管している。

版の材質は銅または亜鉛が用いられ，技法としてはほとんどエングレィビングとドライポイントの併用である。

第三にシルクスクリーンであるが，あいさつ状にシルクを使用しているのが2点，Betty Parssons Gallery での個展(1951, 11, 26～12, 15)のためのポスター1点それから6点1セットのポートフォリオ計9点作成している。なお1940年頃，シルクスクリーンに彩色した作品3点を作成しているが，彩色前のシルクスクリーンは残っていない。

ポートフォリオの作品は1951年の白いキャンバスに黒エナメルで画かれた大作6点をシルクスクリーンでおこしたものでもとの作品は次のとおりである。

Number7（カタログレゾネV2, NO.324）
Number8（カタログレゾネV2, NO.327）
Number9（カタログレゾネV2, NO.340）
Number19(カタログレゾネV2, NO.333)
Number22(カタログレゾネV2, NO.344)
Number27(カタログレゾネV2, NO.328)

このポートフォリオは1951年にポロックが存命中，彼と Sanford McCoy により25部のエディションで摺られたのが第1版である。この作品の一部にはポロック自身のサインとエディションナンバーが記人されている。第2版はポロックの死後1964年に50部，Sanford McCoy 夫人の監修のもとに Bernard Steffen が摺ったものでポロック未亡人が承認している。版画の左下に Estate of Jackson Pollock 1964 と記された円型のカラ押しスタンプが押されている。さらに右下にエディションナンバーが記入されている。

さて最後に，現在われわれが市場で比較的入手しやすいポロックの版画はいかなるものか？，ということになると，以上の記述から明らかなようにエディション部数の多いもの――と言っても10乃至50部であるが――すなわち石版2点，銅版7点，シルクスクリーン6点計15点ということになろう。ただぼくはこれまで石版の実物はみたことがないのである。

1980年12月8日　佐谷和彦